台大日本語文研究第 13 期
2007 年 6 月，頁 27-66
2007-0327 收稿，2007-0628 通過刊登

Frame 的概念及功能以及其認知論分析
對動詞「塗る」「運ぶ」「置く」「沸かす」所形成的 frame 之功能所進行的分析

謝豐地正枝*

摘要

本篇主要探討的有兩點。第一點是由動詞所製造的 Filmore 的 frame 概念為何，第二點是 frame 有什麼樣的功能。筆者將從認知語言學的角度來對這兩點進行分析。本篇的分析考察對象為可以對物品產生作用力的動詞。這次將以句子裡有包含「塗る」「運ぶ」「置く」「沸かす」這四個動詞的句子來當範例。確認這四個動詞在不同的句子裡面所各自製作不同的 frame 後，再利用以下三點來分析 frame 的概念以及功能。這三點為，(1)根據說話者的視點，會將原本形成 frame 的構成要素轉化成其他的構成要素，而這樣的轉化表現和 frame 的概念跟功能有什麼樣的關係。(2)如何去分析解釋構成要素轉化的過程。(3)在分析由動詞所表示的動作行為所衍伸出來的狀態變化或是移動變化情況時，透過分析各個階段的的變化過程，來考察 frame 的功能。

從結果來看藉由本篇可以歸納出幾個要點，例如動詞所製作的 frame，從認知的角度上來看，都有將和其動詞所表達的字義有相關的字範疇化以及使其全部活性化的功能。再者，這些在字義上有關聯的字，不論實際上是否有被言語化，因為已經被活性化了，所以都能

* 台灣大學日本語文學系教授

用來解釋 frame 的概念構造。總結來說，本篇將詳敘說明以下三點：(1)解釋分析 frame 概念。(2)藉由說話者視點的改變，會影響原本 frame 構成的構成要素，轉變成其他要素，而這個過程跟 frame 的功能有很大的關連。(3)說話者的視點，會將句子裡面的某個部份焦點化，不單只是說話者所選定想要言語化的動詞所銜接的主語跟目的語能夠被焦點化，透過 frame 的功能，也有可能讓主語跟目的語之外的副詞，副詞句以及修飾句也被焦點化，言語化。而這兩點便代表 frame 所包含的多重機能性。

關鍵字：フレーム(frame)・スクリプト(script) ・理想的認知モデル (idealized cognitive model=ICM) ・焦点化(焦點化) ・架想経路（conceptual connecting path in space）

A Cognitive Linguistic Analysis of the Concept and Function of the "Frame": Including Japanese verbs of nuru ("to paint"), hakobu ("to carry"), oku ("to place") and wakasu ("to boil")

HSIEH Masae Toyochi*

Abstract

This paper will analyze the concept and function of the "frame", a semantic construction which conveys concepts that intend to evoke a specific understanding or reaction. The analysis will provide sample sentences containing selected Japanese verbs – nuru ("to paint"), hakobu ("to carry"), oku ("to place") and wakasu ("to boil") – and apply the cognitive linguistic theory of "Filmore's Frame Theory" to determine the following: (1) How construction of the frame differs depending on the message the speaker intends to convey, (2) how to identify the differences based on the placement of the verb, speech nuances and inclusion of surrounding expressions and words, and (3) how to categorize these variances into lexical sets depending on the utilized words and their conceptual relations instead of traditional semantic relations such as hyponymy, meronymy and antonymy.

This paper therefore establishes the frame as another approach to Japanese semantic analysis and organization, one outside of traditional grammatical theory which only considers historic semantic relations and sentence components such as the subject and object. Special attention

* Professor of the Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University

will be made not only to conceptual relations, but also the speaker's intent in utilizing specific adverbs, adverb phrases, and modifiers.

Key words: frame, script, idealized cognitive model, speaker's intent, conceptual connecting path in space

「フレーム」の概念と機能に対する認知論的分析
――動詞「塗る」「運ぶ」「置く」「沸かす」の作るフレームの機能に対する分析と考察を中心に――

謝豊地正枝*

要旨

本稿のテーマは、物に対するはたらきかけを示す主な動詞である「塗る」「運ぶ」「置く」「沸かす」という四つの動詞を文成分として含む文を文例として取り上げて、それらの個々の文においてそれぞれの動詞が作る、所謂、フィルモアによる「フレーム（frame）」の構造を個々に示す。そして、フレームの概念と機能が、（１）話し手による視点が、フレームを構成するある構成成分から別の構成成分へと変化して、焦点化される対象が変化するのに伴って文の表現に変化が生じることにフレームの概念と機能とがどのように関わっているか、そして、（２）その表現上の変化のプロセスはどのように明らかにできるかの二点を、話し手の視点の変化に伴って生じる表現上の変化のプロセスを段階別に分析・考察することによって明かにすることを目的にしている。これらの事柄を分析・考察した結果として、ある特定の動詞が作るフレームの機能には、その動詞と意味的に包摂・包含関係や類義関係にあるもの、また、相互に意味的に関わっている典型的な概念、などを含めた認知的にカテゴリー化された概念を表す語の全てを活性化する機能があること、そして、これらの全ての語群の表す概念は相互に連鎖的に結ばれてフレームを構成すること、また、これらの意味的に関連す

* 台湾大学日本語学科教授

る語は、実際には言語化される、されない、に関わらず、活性化されて言語化される時のためにフレームの概念構造を支えていること、などの諸点を明らかにする。

まとめとして、フィルモアによるフレームの概念を明らかにすると同時に、フレームの機能として、（１）話し手による視点が、ある動詞が作るフレームを構成する構成成分の内の、ある一つの構成成分から別の一つの構成成分へと変化するに従って、必然的に生じる焦点化の対象の変化に伴って文表現に変化が生じるプロセスに、フレームが機能的に深く関わっている点、及び、（２）話し手による視点によって文中のある一つの文成分を焦点化する場合には、従来のように、話し手が言語化しようと選択した動詞が要求する主語や目的語のみが焦点化されるのではなくて、フレームによる機能によって、主語や目的語以外の副詞や副詞句や修飾的な挿入句でも焦点化されて言語化される可能性がある、という二点をフレームが持つ多重機能性として指摘する。

キーワード：　フレーム（frame）・スクリプト（script）・理想的認知モデル（idealized cognitive model=ICM）・焦点化・架想経路

「フレーム」の概念と機能に対する認知論的分析
――動詞「塗る」「運ぶ」「置く」「沸かす」の作るフレームの機能に対する分析と考察を中心に――

１．本稿のテーマと目的

本稿のテーマは、フィルモアによるフレームの概念を考察して明らかにした上で、物に対するはたらきかけを示す主な動詞である「塗る」「運ぶ」「置く」「沸かす」を含んだそれぞれの文を例として取り上げて、それらの動詞が作る「フレーム（frame）」が、話し手の視点の変化によって文表現に変化が生じるプロセスと結果に、フレームの概念と機能が如何に係っているかについて明らかにすることである。本稿の目的は、（１）動詞が作るフレームの概念とは何か、（２）フレームを構成する認知カテゴリー化された語群が表す概念はどのように相互に結びついているのか、（３）前述のそれぞれの動詞が作る個々のフレーム構造において、話し手によって強調される視点がフレームを構成する一つの成分から別の一つの構成成分へと変化するのに伴って、視点の差異が焦点化する対象を変化させることによって、文として言語化される際に表現法がどのように変化するか、そして、フレームがそのような表現上の変化にどのように係っているか、（４）その変化のプロセスはどのように明らかにできるか、などの四点に関して、認知論的なフレーム分析法に基づいて分析・考察して明らかにする。まとめとして、本稿による考察・研究の結果に基づいて、動詞の作るフレームの概念と機能の重要さ及びフレームは多重機能性を示す点を指摘する。

１．１　　研究の手順と研究範囲の限定

分析・考察の手順としては、まず、認知論に基づいたフレームの概念とは何かを明らかにする。次に、前項において述べた「塗る」「運ぶ」「置く」「沸かす」などの動詞を含んだそれぞれの文例を

呈示して、それぞれの文例における当事者を参与させた個々の動詞が作るフレームの概念を考える。これらの動詞を選んだのは以下の理由による。例えば、「塗る」は、

（１） 私は刷毛でペンキを壁に塗っている。

のように、必ず二つ以上の対象語を取る動詞である。次に、「運ぶ」は、

（２） 私は一階の研究室の机の上にある『日本史』の本を二階の図書室まで運んだ。

というように、動作主がある起点からある終点まで何らかの方法によって何らかのものを移し変えるために移動する動作を表す動詞である。また、下記の（３）における「置く」は、動作主が何らかの理由によってある物を別の物の表面に接触させて放置する動作を表す。

（３） 私は『日本史』の本を一階の研究室の机の上に置いた。

加えて、「置く」は静的な様態を表す述語の一つであり、次のような表現が可能である。

（４） 私は一階の研究室の机の上に置いてあった『日本史』の本を、二階の図書室まで運んだ。

（５） 机は研究室の窓の側に置いてあります。

次に、「沸かす」は、

（６） 客をもてなすために茶を沸かす。

のように、「原因―結果」の因果関係を表す動詞の内の一つである。以上述べた理由によって、「塗る」「運ぶ」「置く」「沸かす」の四動詞を本稿における分析の対象に選んだのである。

これらの四つの動詞が作るフレームにおける視点の差異によって文として言語化される時に、表現法がどのように変化するかという分析・考察を通して、それぞれのフレームの概念・様態、及び、その機能を一つ、一つ、個々に明らかにする。

関連して、話し手による視点の差異に基づいて、話し手がある特定の動詞が作るフレームの概念・様態を構成するある構成成分に焦

点を置いて、その構成成分を前景化して表現する場合に、どのように表現法が変化するかを分析して解明し、その変化のプロセスを表に示す。また、その変化のプロセスにおいてそれぞれの動詞の作るフレームの概念・様態が、表現法の変化に如何に関わっているかをフレーム分析に基づいて明らかにする。最後に、分析と考察の結果、明らかになった事実に基づいて、フレームの重要さとフレームが示す多重機能性を指摘する。

２．「フレーム（frame）」という概念及び機能に対する考察

２．１　「フレーム」の概念に対する考察

チャールズ・フィルモア（Charles J. Fillmore）は 1975 年にフレームの概念を下記のように定義した。[1]

> ひとまとまりの言語的選択肢の集合で、もっとも単純な場合には単語の集合であるが、文法規則や言語的カテゴリーの選択肢の集合も含まれ、各種の場面のプロトタイプ的な具現例と結びつけることのできるもの。

これより１０年後の 1985 年になると、フィルモアはこの定義に、「関連する複数の要素が一つに統合された具体的な知識の型、或いは、各要素が互いにまとまりをなすような、経験から抽出された式型」であるという補足的説明を加えた。[2] 更に、1992 年になると、認知的に捉え直して、「フレームとはそれなしでは単語が表す概念が意味をなさないような認知構造」であると説明をし直している。[3]

---

[1] F. ウンゲラー／ H. J. シュミット著、池上嘉彦ほか訳『認知言語学入門』大修館書店、1998 年、p.252。(原典：Ungerer & Hans-Jorg Schmid, *An Introduction to Cognitive Linguistics,* by Addison Wesley Longman Ltd., London,1996.)

[2] 前掲書、p.253. (原典：Charles J.Fillmore, ‘’Topics in lexical semantics’ in *Current Issues in Linguistic Theory,* R.W. Cole, ed.,1997, Bloomington, London: Indiana University Press, p.76-p.138 .)

[3] 前掲書、p.253. (原典： Fillmore, Charles J. and Beryl T. Atkins, ‘Toward a frame-based lexicon: The semantics of RISK and its neighbors’ in *Frames, Fields, and Contrasts,* Adrienne Lehrer and Eva Kittay, eds., 1992, Hillsdale, N.J. Lawrence Erlbaum, Assoc., p.75-102.)

これらの定義に拠ると、フレームとは、話し手がある行為をしたいという意思を抱いた場合、その意思が実際的な行動となって表面化して、それに伴って実際に具現化される当事者間の言語による伝達方法を含んだやり取りやその結果を、当事者が予め予想したり想定できたりすることを可能にする「状況」や「場面」として捉えることができよう。言い換えれば、フィルモアによるフレームの概念とは、ある活動・行為を遂行・完了するために関わる当事者がそれぞれの意思伝達を相手に図るために、双方が共通して認識できる「同じ意味を共有する領域範囲」に近いような「状況」とか「場面」であることが分かる。また、フレームの概念は、語と語との関係に関しては、二つの語の意味は直接的に関係を持つのではないと主張する。これらの二つの語の意味関係は、これらの二つの語の表す概念が作るところの「共通したフレーム」を通して、そのフレームの枠内において、それぞれの語の意味概念がもう一方の語の表す意味概念とどのような意味的な関係に位置づけられるかに基づいて間接的な関係をもつのであるとフィルモアは見なす。[4]

フィルモアによるフレーム論に基づくと、ある特定の状況或いはある特定の動詞が作るフレームに関わっているのは、言語化された「その特定の動詞」の外にも、「その特定の動詞と意味的に包摂関係」を表す語とか、その特定の動詞と包含関係（意味的に上位と下位カテゴリーに分けられるが意味的に結ばれているもの）を示す語」とか、または、「その特定の動詞と類義関係にあって意味的に相結ばれているもの」、などなどの内の典型的な概念を含んだもの全てによって形成された語群の言語的連合体を「認知カテゴリー化された概念を表す語」と呼ぶ。そして、この語群は相互に間接的に結び付けられてフレームを構成しているので、ある特定の動詞がフレームを構成すると、そのある特定された動詞に係るこれらの語群

[4] 松本曜、『認知意味論』、大修館書店、2003 年、p .67。（原典：Fillmore, Charles J. and Beryl T. Atkins, ‘Toward a frame-based lexicon: The semantics of RISK and its neighbors’ *Ibid*.）

が、実際に言語化される、されないに係らず、活性化される。その意味は、これらの語群は、所謂、「スタンド・バイ」の状態にあると考えられるのである。

ともあれ、話し手と聞き手という実際の当事者にとっては、その場でのフレームを正しく把握できれば、その状況・場面での互いの視点を正確に理解することができて、互いの意思の伝達行為を滞りなく完了させるためのやり取りを予想したり、想定したり、推測したりすること、の助けになる。また、実際の意思伝達が完結した時の結果に対する予想や想定ができること、などの助けとなる。加えて、当事者がフレームを正しく把握している場合には、やり取りのための話し手と聞き手による動詞の選択に対する互いの予想や、その動詞が取る特定の動作・作用・状態などが辿る経路や、あるいは、その動詞の表す動作の対象を成すある目的語など、を互いに予想したり想定したりすることもできることを意味している。聞き手の側にとっては、話し手が自らの意思によって文中のどの文成分に焦点を合わせて、それを前景化して表現する表現法を選択するかを予想することが可能になる。これらのことは、また、話し手と聞き手という当事者のみならず、当事者以外の第三者に対しても、やり取りの内容や方向、或いは、結果などを予想したり、想定したりすることを可能にするのである。

２．２　フレームの機能及び認知カテゴリー化された語群に対する考察

フレームの主な機能には、ある考えとか行動とかを表す動詞とその動詞に意味的に係わりあっていて、しかも、典型的な概念を示すために、その語を構成していて認知カテゴリー化されている関係にある概念を表す語の全てを同時に活性化させて、ある動詞や語を選んで実際に言語化させるような、「状況・場面」を話し手或いは当事者に思い起こさせる機能があることである。例えば、「バスで遠足に行く」という「場面」に我々が直面した場合には、その「バス

で遠足に『行く』」が作るフレームを構成する成員に属する類義語や意味的に関わりが有るものを含めた、認知カテゴリー化された語群を、我々は直ちに思い浮かべる。それらの認知カテゴリー化された語には、例えば、「同級生」、「先生」、「バス」、「お弁当」、「おやつ」、「飲み物」、「集合時間」、「集合場所」、「行き先・目的地」、「遠足のスケジュール」「バスの窓の外の風景」、「高速道路や道」、「休憩所」、「記念撮影」、「観光する」、「見学する」、「バス旅行する」、「バスの発着所」、「バスの運転手」、「バスのガイドさん」「バスの中での歌唱」「天気予報」「団体で遠足をする」「団体で遠出する」「団体で日帰り旅行をする」「団体で見学する」など、などの最低２６種類の「バスで遠足に行く」を構成する典型的な概念を含んだ語群を上げることが出来よう。その意味は、「バスで遠足に行く」という状況が作るフレームは、その状況を表す「（バスで遠足に）行く」という概念に相互に関わっていて、しかも、認知カテゴリー化されている概念を表す語の最低２６種類の語の全てを含む語群を、直ちに話し手の頭脳の中で活性化させるのである。

そのプロセスを説明すれば、ある特定の動詞、ここでは、「バスで遠足に行く」の作るフレームは、そのフレームの概念を成立させている「バスで遠足に行く」に係わっている認知カテゴリー化された語の、例えば、前述の最低２６種類の概念を含む語群の「相互の意味関係」によって成立している。それらの最低２６種類の概念を含む語群は、「相互作用的ネット・ワーク」によって互いに繋がれて結ばれている。そして、それらの認知カテゴリー化された語群は、その特定の「バスで遠足に行く」の作るフレームを互いの結び付きによって構成していると考えられる。言い換えれば、ある特定の動詞が実際にフレームという「ある場面・状況」を作る時に、意味的に認知カテゴリー化された語群が相互作用的ネット・ワークによって活性化されて、話し手がいつでもそれらの語の表す概念を言語化できる状態させると考えられる。

けれども、活性化された全ての語群があるフレームにおいて言語化されるとは限らない。もし、「ある特定の動詞が作る一つのフレーム」から「別の動詞が作る別の一つのフレーム」へと場面が移行すれば、別の動詞が作る新たなフレームを構成する認知カテゴリー化された別の語群が相互作用的ネット・ワークによって活性化されるのである。このような 概念と機能を示すフレームについて、マーヴィン・ミンスキーは「『フレーム』とは、定型化された状況・場面を表すデータ構造である」[5] と定義しているのは、フレームの概念と機能を的確に指摘しているものと言えよう。

２．３「フレーム」と「理想認知モデル（idealized cognitive model=ICM）及び「スクリプト（或いは「シナリオ」）」との関係に対する考察

この項においては、語に対する認知意味論の中心的概念の一つであるレイコフによる理想認知モデルとフレームの概念との関係について考察する。

人間社会において「通念」として受け容れられる、ある「もの」や「こと」を表す典型的な属性をレイコフは「理想認知モデル（idealized cognitive model＝ＩＣＭ）と呼んだ。[6] 例えば、「外科医」の属性は下記のように表現できよう。

（７） ａ． 青年男性である。
ｂ． 知能指数が高い。
ｃ． 常に沈着冷静かつ判断力に富んでいる。

において、上記（７）の「ａ・ｂ・ｃ」によって示される属性は、「外科医」という概念を含む文を言語化する際に、優先的に導入される「文脈仮定の集合」である。言い換えれば、「外科医」という

[5] Marvin Minsky, ‘A Framework for Representing Knowledge’ in P.H. Winston, ed., *The Psychology of Computer Vision*, 1975, McGraw-Hill, New York, p. 211-p. 277.

[6] ジョージ・レイコフ『認知意味論－言語から見た人間の心』、池上嘉彦・河上誓作ら訳、紀伊国屋書店、1998 年増補版、ｐ．142－ｐ．167。（原典：George Lakoff, *Womenn,Fire, and Danerous Things—what Categories Reveal about the Mind,* 1987, The University of Chicago Press.）

概念を含んだ文を言語化する時には、我々は、上記の属性を基本とした「単純化された文脈仮定」を選択しているのだとも言えよう。また、上記のこれらの属性は、「女の外科医は常識だとする社会通念が未だ確立されてはいない」ことも示している。そのため、「女の外科医」や「優柔油断の男の外科医」などを言語化する際には、現段階では、「特別な文脈によって指定する」のが一般的な方法である。当然ながら理想認知モデルは、異なる社会では異なる文化や社会的な判断基準によって違ってくる。また、同じ社会においても、文脈が異なれば、同じ語に対して異なる理想認知モデルが適用される。[7]

上記のレイコフによる「理想認知モデル（ＩＣＭ）」は、フィルモアによる「フレーム」の概念に類似した概念である。フィルモアによるフレームの概念に類似したものには理想認知モデルの外、ラネカーによる「認知領域（cognitive domain）」の概念がある。「認知領域」説の視点に基づけば、ある状況・場面において活性化される語の意味構造は、特定の認知領域との関連で特徴付けられるとみなす。[8] そのため、ラネカーによる「特定の認知領域」の概念は、フィルモアによるフレームの概念に似ているのは確かであろう。但し、ラネカーによる「特定の認知領域」の概念では、特徴付けられる語の間に見出される「図」と「地」の意味関係が最も重要で、その二者に焦点が置かれている点がフレームの概念とは異なる点であると指摘できよう。加えて、ラネカーによる「スキーマ論」もこの「認知領域」の概念と関連があるが、本稿ではこの点については深く掘り下げない。[9]

---

[7] 金水敏・今仁生美『意味と文脈』、岩波書店、2000年、ｐ．166。

[8] Ronald W. Langacker, ‘A View of Linguistic Semantics,’ in T*opics in Cognitive Linguistics*, ed. Brygida Rudzka-Ostyn, John Benjamins, Amsterdam, 1988, p.49-p.90.

[9] Ronald W. Langacker, *Foundations of Cognitive Grammar-Vol. 1 Theoretical Prerequisites*, 1987, Stanford University Press, p. 68-p.91. 筆者注：ラネカーによるスキーマに対する説明：Structure *A* is a schema with respect to a schema with respect to structure *B* when *A* is compatible with the specifications of *B* but characterizes corresponding entities with less precision and detail.（The

レイコフによる理想認知モデル（ＩＣＭ）とフィルモアによるフレームの概念との関連性について、金水敏・今仁生美は、「『フレーム』の概念はこの理想認知モデル（ＩＣＭ）の一種と考えられる」とみなしている。[10]　本稿もこの説に同意する。けれども、これらの二説の異なる点としては、理想的認知モデル（ＩＣＭ）はフレームよりは広い概念であって、フレームをその一種として含んでいるとは言うものの、フレームの方がスコープの範囲が狭くて、「当事者がある目的を達成するための一場面、一場面に制限されている」点が理想認知モデルとは異なっていることを指摘することができよう。

関連して、認知言語学に深く関連しているその他の概念、例えば、「スクリプト（或いは、「シナリオ」）」「領域（意味領域と行動可能な領域を含む）」「相互作用ネット・ワーク」[11] などの概念の全ても、前述の「理想認知モデル」の一種である。ただ、フレームは「当事者がある目的を達成するための一場面、一場面」に制限されている点を忘れてはなるまい。これに対して、例えば、スクリプトは、当事者がある目的を達成するために一連に連鎖的に繋がった行動をとる「連続的な行動パターンの組み合わせ」というものに近い点が指摘できよう。そして、その「一連の連鎖的で複雑な行動

---

relation between *A* and *B* is equivalent to that between a super-ordinate and subordinate node in a taxonomic hierarchy.）簡単に要約すれば、スキーマ関係にあるＡとＢとは、例えば、タキソノミーを表す図における上位にあるＡと下位関係にあるＢとが形成する包摂関係に等しい。その意味は、「ＢにはＡを構成している概念の全てが含まれているが、同時に独自の特徴を構成している概念も含んでいる。そして、ＢはＡには必ず下位カテゴリーの一つとして属しているという、意味的には共通する意味特徴を示す類似性を共有する認知カテゴリーによって結ばれている包摂関係に等しい」という意味を指す。

[10] 金水敏・今仁生美『前掲書』、ｐ．167。

[11] Ronald W. Langacker, ‘Settings, participants, and grammatical relations’ in Savas L. Tsohatzidis ed., *Meanings and Prototypes, Studies on Linguistic Categorization*, 1990, p. 213-p.238, において、相互作用ネットワークとアクション・チェイン／文の構成要素の選択が説明されている。ラネカーによれば、ある動作が「背景（地）」と「前景（図）」の構図によって相互作用することに焦点が置かれて、名詞が状況・場面の参与者を表し、動詞と前置詞がそれらの相互作用を表すという点を踏まえて相互作用のネット・ワーク（inter-active network）として示すことが可能になると指摘する。

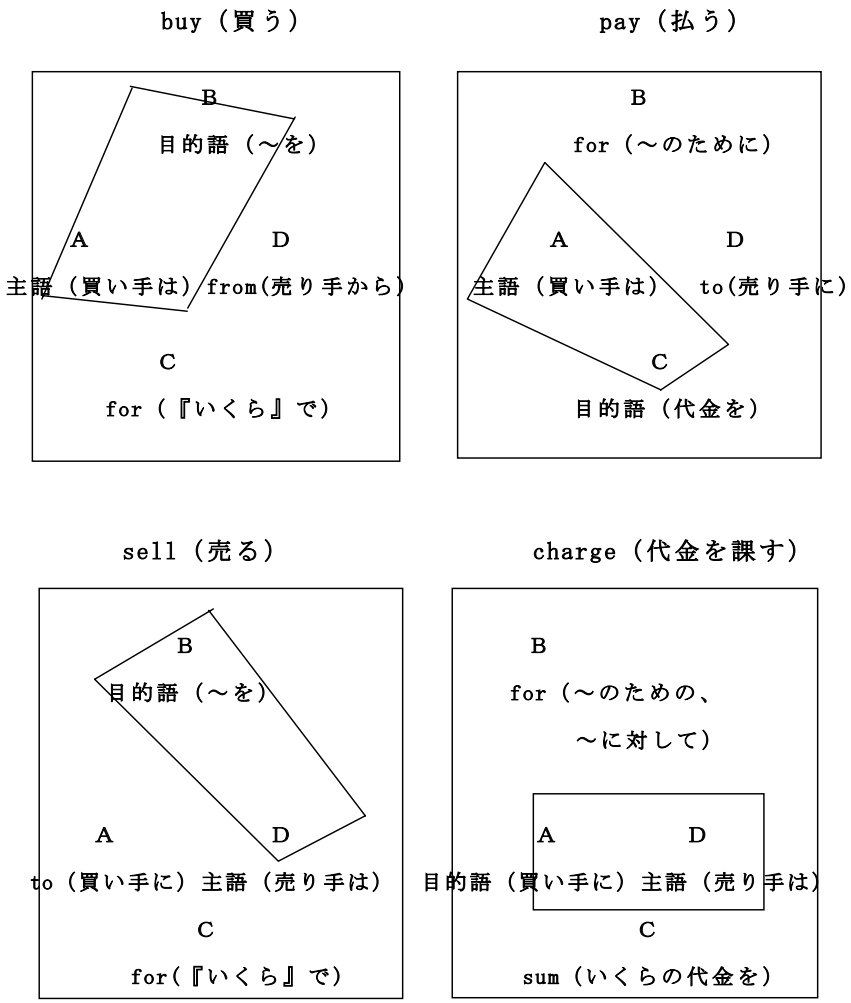
の組み合わせ」とは、ある特定の目的を達成するための通常的に見られる人間の行動パターンの筈であると看做される、「典型的な行動パターン」を表していなければならない点がフレームとは異なる点である。

次に、フレームとスクリプトとの差異について考察する。まず、ある一つの行為、例えば、「Commercial Event＝商業行為事態・状況」を完結させるための、当事者間の一連の連鎖的な動作・行為の発生を可能にする売買に関わる場面的なフレームと、それを構成する構成成分、及び、そのフレームにおける話し手による視点の差異・変化に伴って、焦点化される成
分がどのように変化するか、そして、その結果、どのような変化が表現法に生じるかについ
て考察する。[12] まず、「図　1」を見られたい。

「図　1」は「Commercial Event＝商業行為事態・状況」の概念を表すフレームを構成する認知カテゴリー化された動詞には、「買う」、「売る」、「払う」、「代金を課す」、などがあること、そして、それらの動詞が話し手によって焦点化される対象が変化した場合にどのように相互の意味関係が変化して、結果として、表現法が変化するかを示している。例えば、話し手が「buy＝買う」という動詞に視点を置く場合には、「A＝主語である買い手」と「Bで表される目的語＝何を買うかという対象になる商品・物品」が焦点化される。そのため、「Dで表される[売り手]」には、「誰から買った」という意味を表す。この場合、英語文では「from」という前置詞を伴って、日本語文では「～から」という助詞を伴って表現

[12] Charles J. Fillmore, 'The case for case reopened' in P. Cole and J.M.Sadock, eds, *Syntax and Semantics, Vol.8: Grammatical relations*, Academic Press, S.F., 1977, p.59-p.81.

「図　1」　【Commercial Event(商業活動状態】を示すフレームと（話し手による）buy, pay, sell, charge,が採る視点と焦点化している構成成分との関係図 [13]



[13] 「図　1」はウンゲラー, F.／シュミット, H.J.著、池上嘉彦ほか訳 1998 年、『認知言語学入門』大修館書店。(原典：Ungerer & Hans-Jorg Schmid, *An Introduction to Cognitive Linguistics,* by Addison Wesley Longman Ltd., London,1996)のｐ.220－ｐ.222 を参考にした。

される。この「ある売り手から」という語句は焦点化されていないので、実際の場では売り手・買い手の双方によって常に言語化されるかどうかは分からない。しかし、この場合の状況を形作る「フレーム構造」を構成する一つの成員であることは確かである。

次に、話し手が「pay＝払う」という動詞に視点を置いた場合には、「Aで表される主語＝代金の払い手（実は買い手）」と「Cで表される目的語＝払う代金」が焦点化される。そのため、「Dで表される払われる相手（実は売り手）」は、第二目的語になるために焦点化されない。また、「Bで表される商品・物品」に関しては、「買った商品のための代金」という概念を表していて、話し手によって焦点化されていないので言語化されない場合もあり得る。

また、もし、動詞「sell＝売る」に視点を置けば、「D＝主語である売り手」と「Bで表される目的語、すなわち、売る商品・物品」が焦点化されて、「買い手であるA」は、前置詞である「to＝「に」」を伴って「買い手に」という第二目的語として扱われるために、第一目的語である「商品」と同じように焦点化されるわけではない。そのため、「買い手に」という語句が、実際の状況下で必ず言語化されるとは限らない。また、「Cで表される価格」には「B＝商品・物品」の代金であることを示すための、前置詞「for＝（買った商品の）ための（代金）」という意味を表すが、この「～ための～」という語句も話し手によって焦点化されていない関係で、「C」が示す「いくらで売ったかという代金」が常に言語化されるとは限らない。しかし、認知カテゴリー化されている語であるから、「商業行為事態・状況」を示すフレームの構造を構成している一構成成分であることは確かである。

一方、「charge＝代金を課す、代金を負担させる」という動詞に視点を置けば、「Dで表される売り手」と「Aで表される買い手」が焦点化される。そのため、「Bで表される商品・物品と「Cで表される代金（英語文の場合は、前置詞を伴わずに直接代金を言う）」を表す。これに対して、日本語文の場合は、【「いくらの」

＋「代金を課す」】、或いは、【「いくらの」＋「代金を負担させる」】という名詞句を伴って表現される。したがって、日本語文の場合には、「売り手」が買い手に【「いくらの」＋代金を課す」】、或いは、【「いくらの」＋「代金を負担させる」】というように、「いくらの」と「代金を課す」という二つの語句は大体一緒に用いられるために、「いくらの」が話し手によって焦点化されていない成分でも高い確率で言語化される可能性があるのである。

関連して、「商業行為事態・状況」を表すフレームに比べて、例えば「A空港からB空港まで飛行機で旅行する」場合[14]、或いは、「レストランで食事をする」場合[15]、などのように、より大きな空間を移動するような動作とか目的とかを表現する時に支えるフレームの構造について考える。例えば、前述のこれら二つの場合は、「一つのフレームによって把握・想定できる可能な意味領域」よりも領域が意味的にさらに大きく複雑に拡張されて、しかも、複雑な複数の行動パターンの組み合わせとそれに伴う複数のフレーム概念によって支えられていることが推定される。このような「一連の複雑で連鎖的な行為の組み合わせで発生し終結する物事」は、一つ、一つの場面をカバーするフレームの概念によっては扱うことが不可能である。そのために、「スクリプト（或いはシナリオ）」の概念によって扱われる。「スクリプト」はフレームによるある一場面とその一場面に関連した次の場面というように、数多くのフレームによる数種類の場面の組み合わせによって構成されているのである。

また、「相互作用ネット・ワーク」とは、ラネカーによれば、ある動作が「背景（地）」と「前景（図）」の構図によって相互作用することに焦点が置かれて、名詞が状況・場面の参与者を表し、動詞と前置詞（日本語文においては、動詞と助詞）がそれらの相互作用を表すという点を踏まえて相互作用のネット・ワーク（inter-

[14] Marvin Minsky, 'A Framework for Representing Knowledge' in P.H. Winston, ed., *The Psychology of Computer Vision*, 1975, McGraw-Hill, New York, p. 212.
[15] Roger C. Schank and Roger P. Abelson, *Scripts, Plans, Goals and Understanding*, Lawrence Erlbaum, Hillsdale, N.Y., 1977.

active network）として示すことができると指摘する。この相互作用ネット・ワーク説に基づいて考えれば、ある特定の動詞の表す概念やフレームを支えて形成する「認知カテゴリー化された全ての概念」は「相互作用のネット・ワークによって相互に結び付けられている」と考えられるのである。

３．　話し手による視点の差異によって生じる表現法の変化及びその変化プロセスに対するフレームの係わり合い方に対する分析と考察

この章においては、動詞「塗る」「運ぶ」「置く」「贈る」「沸かす」を含んだ文において、話し手による視点の差異がどのように表現法に変化を生じさせるか、そして、その変化のプロセスにフレームの概念がどのように実際に係っているかについて、分析・考察する。

３．１　動詞「塗る」の作るフレームの概念に対する分析と考察

動詞「塗る」は「取り付け」の動作・行為を表して、第一の対象を第二の対象にくっつけるという関係を表現する。もし、下記の文例中のある語が言語化されなくても、その語の表す意味が活性化されて話し手にも聞き手にも共通に認識されて暗黙裡に了解されている場合には、（　）を付けて示す。

（８）　私は（刷毛で）壁にペンキを塗っている。　【前掲】

（９）　あなたは読んでいた本を机に伏せて、私の顔を見た。

において、（８）文中の「塗る」、（９）文中の「伏せる」、というそれぞれの動詞は、「取り付け」の動作・行為を表す動詞の内で、物理的な動作を指し示す動詞である。[16]　（８）文中の「塗る」行為は、一般的にはある物の面に指や刷毛や筆やその他の道具を使って塗料や顔料などの粉末や液体をなすり付ける動作を表す。[17]

---

[16] 言語学研究会編『日本語文法・連語論（資料編）』、むぎ書房、1983 年、p .28－ p .29。

[17] 新村出編「広辞苑」、岩波書店、1990 年度版、ｐ．1719．。

また、（８）文中の「（壁にペンキを）塗っている」は「ペンキ」を「壁」の表面に何らかの道具によって、例えば、「刷毛」などで、接触させてなすり付けている現在進行中の動作を指示する。これに対して、（９）文中の「伏せた」は「本を開いたままひっくり返して」「机に」接触させて置いた状態にする行為を表す。この場合、「伏せる」という「取り付け」の意味を表す動詞は、「本を」「机に」という二単語と組み合わさった連語を作る。

次に、「（刷毛で壁にペンキを）塗る」という「刷毛で」という道具格が加わった状況を考察すれば、道具格の「刷毛で」と、第一の対象語である「ペンキを」と、第二の対象語であり場所格を示す「壁に」という三単語との組み合わせによって、「刷毛で壁にペンキを塗る」という連語的結びつきが作られている。そのため、話し手が、仮にこの三単語との組み合わせによる連語的結びつきを用いる意図がありながら、「刷毛で」という道具格を具現化して表現しなくても、「（刷毛で）壁にペンキを塗る」という表現を支える意味構造には「刷毛で」が既に含まれているために、聞き手はこの道具格を簡単に推論できると考えられる。

関連して、（８）文中の「（刷毛で壁にペンキを）塗る」という動詞が作る「フレーム」について考える。（８)文中の「（刷毛で壁にペンキを）塗る」という動詞によって活性化される認知カテゴリーの構成成員である語群としては、「新しいペンキを壁に塗って模様替えをしたいという動作主の意思」、「ペンキを塗っている動作主＝話し手」、「動作主が塗り替えたい壁のある家」、「その家の中にあるペンキを塗りたい壁のある部屋」、「刷毛」、「新しいペンキ」、「新しいペンキ入りの缶」、「缶を開けるドライバー」、「梯子」、「ペンキを薄める液」、「ペンキを薄める液の入った缶」、「汚れ拭きの雑巾」、「汚れ予防のエプロン」、「床を覆う汚れ予防用の紙・ビニールシートなどの広げて覆うことができる物」、「開けてある窓（ペンキを塗る時には空気を入れ替える必要があるため窓を開けるのは常識である）」、「窓から見える外の風

景」、「窓から吹き込む風」、「模様替えによって変わる部屋の雰囲気を見る楽しみ」など、などの最低１８種類の語が含まれる。

次に、「（刷毛で壁にペンキを）塗る」という動詞の作るフレームを構成している主な構成成分について考えれば、「（手に刷毛を持ってペンキを塗っている）動作主」、「刷毛」、「新しいペンキ」、「壁」という四要素である。この場合の主語は「（手に刷毛を持って壁にペンキを塗っている動作主）」であり、「（壁にペンキを）塗る」という動詞の第一の対象は「ペンキ」で、第二の対象は「壁」である。そして、（８）文中の動詞「（刷毛で壁にペンキを）塗っている」は、現在進行中の動作を表している。加えて、「刷毛で」という道具格は、「（刷毛でペンキを）塗る」が作る「フレーム」を構成する構成成員として、認知カテゴリー化された語群の一つとしても含まれているので、「刷毛で」という道具格は「塗る」という動詞がフレームを構成する際には、直ちに活性化されるものと考えられる。けれども、「刷毛で」という道具格が話し手によって焦点化されていなければ、「刷毛で」が常に具現化されるとは限らないのである。これらの二つの理由によって、聞き手は単に「ペンキを塗る」という表現を聞いたのみであるにもかかわらず、直ちに「刷毛で」という道具格を思い浮かべるものと思われるのである。

次に、これらの主な構成成員が作るフレームにおける話し手による視点の変化によって、焦点化される対象が変化した結果、表現法が変化するプロセスを考える。話し手が「（手に刷毛を持ってペンキを塗っている）動作主」を前景化させて表現する場合を（１０）文にて、「ペンキ」を前景化させて表現する場合を（１１）（１２）の二文にて表す。また、「刷毛」を前景化させて表現する場合を（１３）（１４）文にて表し、「壁」を前景化させて表現する場合を（１５）（１６）の二文にて表す。

（１０）　私が（刷毛で）壁にペンキを塗っている。　【前掲】

（１１）　ペンキが（私によって刷毛で）壁に塗られている。

（１２）　ペンキで（私は）壁を塗っている。
（１３）　刷毛が壁にペンキを塗る時に（私に）使われている。
（１４）　刷毛で（私は）壁にペンキを塗っている。
（１５）　壁がペンキで（私に）塗られている。
（１６）　壁がペンキで塗ってある。

において、（１５）文と（１６）文の違いは、（１５）文が、「今、壁と、ペンキを塗っている動作主との二者の関係は、どのような状態にあるか、ペンキを塗っている動作主は壁に何をしている状態にあるか」を表現しているのに対して、（１６）文は「壁は、今、どのような状態にあるか、ペンキ塗りの仕事は既に完成したので、壁が今はどんな状態に変化しているのか」という、「塗る」という動作・行為の完了時の結果もフレームに含まれる。そして、動作主は完全に話し手の視点外にあるので、（１６）文のように表現される動作主は文中に共起できない。そのため、（１６）文を表現する話し手は、壁にペンキを塗った動作主と同一人物である可能性もあるが、その動作主とは別人である可能性もあるのである。

以上の分析と考察の結果、文中に見出される「（刷毛で壁にペンキを）塗っている」に関わる「動作主と道具」、「動作・行為の様態」、「原因」、「経路」、「変化するプロセス」、「変化した状態」のそれぞれの要素の相互関係を「表　１」に示す。[18]

では、「表　１」に示された変化の具体例に基づいて、フレームにおける話し手による視点を「新しいペンキが塗られる壁の表面」に移して、「表面上変化して行く壁の変化の様態」を焦点化した場

[18] 「表　１」はウンゲラー，F.／ シュミット，H.J.著、池上嘉彦ほか訳 1998 年、『認知言語学入門』、大修館書店、ｐ.240～ｐ.245 を参考にして筆者が作ったもの。（原書：Ungerer & Hans-Jorg Schmid, *An Introduction to Cognitive Linguistics,* by Addison Wesley Longman Ltd., London, 1996）。
この原書が引用した原典は、Talmy, Leonard, ‘The Windowing of Attention’ in Masayoshi Shibatani and Sandra A.Thompson,eds, *Grammatical Construstions: Their Form and Meaning,* Oxford University Press, Osford,1996。

合の表現上の変化を考える。

（１７） 新しいペンキが（動作主が手に持っている）刷毛で壁の表面にこすりつけられて、（壁に）塗りつけられていくにつれて、壁の表面の新しいペンキが塗られた部分の面積が広がっていく。

においては、「新しいペンキが壁にこすりつけられて、（壁に）塗りつけられていくにつれて」という挿入句的な副詞句が話し手によって焦点化されるために前景化される。したがって、（１７）文の全文の内容は、刷毛が左から右へと動いて新しいペンキを壁の表面にこすりつけられて、塗りつけられていくにつれて、壁の表面に新しいペンキが塗られた部分の面積が増加して、それにつれて壁の表面が変化して行くさまを表現する。この場合、「動作主」は言語化されなくても、聞き手は「刷毛」によって「動作主」の存在を推論できるのは、「刷毛（部分）」と「動作主（刷毛を手に持っている全体）」とは、「部分／全体」の意味関係に支えられたメトニミー関係にあることに基づいているからである。

「表　１」　動詞「塗る」による事態の変化を支える要素の具体例

【様態】	
「図」	**「地」**
（動作主〔＝私〕の手に持っている）刷毛	**壁**
実際の変化――壁の表面の状態上の変化：　（１）刷毛が動けば動くほど新しいペンキによって塗られた壁の表面の面積が増加するという変化、と、（２）そのようなペンキによって塗られた壁の表面の面積が増加すればするほど、壁の表面上のペンキが塗られていない空間の面積が減少するという反比例の関係を呈する変化、の二種類の変化。	

「変化を起こす原因」とその原因によって起こる変化のプロセスと経路―― （１）何箇所かに区切られた壁の一区切り目の、最上段であって天井と境目になっている最初の区切りの右上角の部分を起点として、動作主が持っている刷毛で左から右へとペンキを壁にこすりつけて、次に、そのすぐ下に位置する、未だペンキが塗られていない部分を再度同じ動作で塗っていく。（2）刷毛が新たにペンキを塗った部分から未だ塗っていない部分へとだんだんと移動するに従って、新しいペンキで塗られた壁の面積が広がる。（3）刷毛が床に接触すると、次の一区切りへと塗り手が移動して、再び「刷毛で新しいペンキをこすりつける」動作を繰り返す。（4）そして、最後の一区切りの壁の面も新しいペンキによって塗られる。（5）壁全体が新しいペンキによって塗られた状態へと変化する。
結果――変化した状態 新しいペンキで塗られた壁が出現する。

また、（１７）文によって表現される「壁の表面の新しいペンキが塗られた面積が増加するにつれて、変化して行く壁の変化の様態」を前景化した場合の、「（壁にペンキを）塗る」が作るフレームの概念の種類は、壁の表面の状態が変化するという、「事態・状態の変化フレーム」の一種だと考えられよう。（１７）文によって表現されている「（壁にペンキを）塗る」が作る事態・状態変化のフレームにおける「図」と「地」、及び、実際の壁の表面に生じる変化、並びに、変化を起こす原因とその原因によって起こる変化のプロセスと経路、及び、結果を「表　１」に示す。そして、「塗る」による事態の変化を支える要素の具体例に基づいて、「塗る」の作る「取り付け・変化事態レーム」を分析して「表２」に表す。

「表　２」においては、「中間部分」が「顕在化」しているため、

その段階において、話し手の視点が現在進行中の「（刷毛で）ペンキを塗っている動作、及び、ペンキが塗られていく壁の表面の変化」に置かれた場合に、経路に存在する「新しいペンキを塗っていくにつれて壁の表面のペンキを塗った面積が広がって変化する様態」を表現している。これは、この挿入句的な副詞句が焦点化された結果、表現法そのものが変化するメカニズムを表す。

「表　2」　「（刷毛でペンキを）塗る」の作るフレーム概念に対する分析

「図」	「地」	「中間部顕在化」
「動作主」 （手に刷毛を持った）私	壁	（便宜上、区切られた壁の一区切り一区切りに）（新しい）ペンキを、塗っているさま
「原因」	壁を新しいペンキを塗ることによって、部屋の模様替えをして、変化した部屋の雰囲気を楽しみたい。	
「始点潜在化」	（通常、新しいペンキが塗られてない壁の表面の、天井と壁の境目の、壁の左上の角のところ。）	
「中間部顕在化」	現在進行中の（刷毛で）ペンキを塗っている動作及びペンキが塗られていく壁の表面の面積が増加する変化。	
「変化の経路」	便宜上、区切られた壁の表面の一区画、一区画を刷毛で新しいペンキを塗っていくにつれてペンキで塗られた壁の表面の面積が刷毛の動きに比例して増加していく。	

「終点潜在化」	壁の表面全部が新しいペンキで塗られた時点で動作は完了。（通常、新しいペンキが塗られた壁と床との境目の、壁の右下の角のところ。）

３．２ 動詞「運ぶ」・「置く」の作るフレームの概念に対する分析と考察

「運ぶ」はある物をある場所から別の場所へ移し変える動作を表す。はたらきかけを受ける物は空間的な位置変化をするだけにとどまる。そのため、場所を表す「に」格や「へ」格、そして「から」格や「まで」格を後接する名詞を伴うことによって「運ぶ」という動作を完了させることができる。[19]

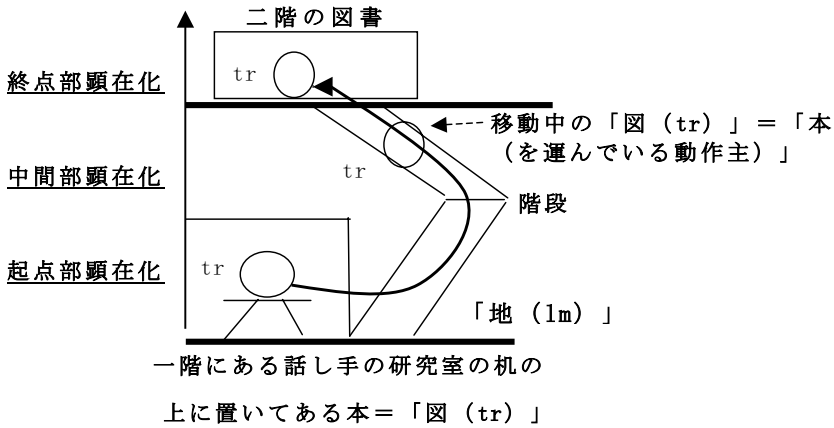
（１８） 私は一階の研究室の机の上に置いてあった『日本史』の本を、二階の図書室まで運んだ。〔前掲〕

において、話し手は聞き手に「机の上にある本を」「階段を上がって」「（机の上から）二階の図書室まで」移し変えたことを表現している。この場合、動詞「運ぶ」が作るフレームによって活性化される認知カテゴリーとしては、「二階に図書室のある学校などの教育機関・会社」、「一階にある研究室」、「机」、「本棚」、「本」、「紙」、「文房具」、「電話」、「階段」、「二階にある図書室」、「書籍カタログ入りのキャビネット」、「コンピューター」、「プリンター」、「灯り」、「窓」、「ドア」、「二階建ての建物」などなどがある。（１８）文による「運ぶ」が作るフレームには、「本を運んだ人＝話し手」、「（机の上にある）本」、「一階の研究室＝（その運ぶべき）本がある場所」「二階の図書室＝移し変え先」、の四つ

[19] 言語学研究会編『前掲書』、むぎ書房、ｐ.33。

の要素が「運ぶ」という動作に関わっている。この場合のフレームは「本」に視点をおいた「移動事態のフレーム」である。上記（１８）文の場合には、「一階にある研究室の机の上にある本を、そこから階段を上がって二階の図書室まで運ぶ」経路がはっきりしているので、経路顕在化スキーマによって「移し変え・移動」の様態を示すことができる。（１８）文を表す概念を、「経路顕在化のスキーマ」として「図　２」に示す。

「図　２」　　「経路顕在化のスキーマ」



「図　２」は、（１８）文が表す概念を示した経路が顕在化している関係で、経路のどの段階においても、視点が変化する場合があることを示唆している。また、「図　２」の示す「図（tr）」として表示されているのは「移動している動作主とその動作主が持って運んでいる本」がたどる「経路」である。この経路は起点と終点とが異なる場合を表しているが、このような経路を認知言語学では「開放経路」と呼ぶ。（１８）文によって表される起点部中間部・終点部顕在化とその組み合わせを「表　３」として示す。[20]

[20]「表　３」「表　４」は Talmy, Leonard, ‘The Windowing of Attention’ in

「表　３」　起点部・中間部・終点部顕在化とその組み合わせ

１．単一部分顕在化
a.　起点顕在化　—　一階の研究室にある机の所
b.　中間部潜在化　—　一階から二階へ行く階段を上る
c.　終点顕在化　—　二階にある図書室
２．複数部分顕在化
a+b:　起点部顕在化・中間部潜在化——　一階の研究室にある机の所から本を取って、二階へ行く階段を上る
a+c:　起点部・終点部顕在化——　一階の研究室にある机の所から二階にある図書室まで
b+c:　中間部・終点部顕在化——　一階から二階へ行く階段を上って二階にある図書室まで
a+b+c:　「経路」全体に対する最大の顕在化——　一階の研究室にある机の所から二階　へ行く階段を上って二階にある図書室まで
３．図:　動作主が本を運ぶために移動しているため、「図」は移動中の動作主とその動作主が持って運んでいる本

「表　３」は、経路のある部分、例えば、潜在化されているが経路の一部分として存在していながら「一階から二階へ行く階段を上って」という、省略してある部分に関しては、常に復元可能であることを示す。そして、事態フレームの構成要素が顕在化されているものの数の多少にかかわらず、「経路」は常にその全体が概念化されていることになる点に注意したい。認知的な処理に基づけば、経路の全体が認知的な表示対象になっているからである。

Masayoshi Shibatani and Sandra A.Thompson,eds, *Ibidd*,1996, p.245 を参考にした。

関連して、一階の研究室にあった本を二階の図書室に運ぶ経路の途中において、例えば、「階段を上がる時に本を落としそうになりながら」という事態が起こったと仮定して、その事態に視点を合わせて焦点化すれば（１８）文は、下記の（１９）文のような表現法へと変化するものと推論できよう。

（１９） 階段の途中で落としそうになりながら、私は一階の研究室に置いてあった『日本史』の本を、階段を上って二階の図書室に運んだ。

における起点部顕在化、中間部顕在化及び潜在化部分、終点部顕在化の組み合わせを分析したものを「表　４」に占めす。

「表　４」

起点部顕在化・中間部顕在化部分及び潜在化部分・終点部顕在化とその組み合わせ

１．単一部分顕在化
a.　起点顕在化　—　一階の研究室にある机の所で本を取る
b.　中間部顕在化　—　階段を上っている途中で、運んでいる本を落としそうになる
c.　終点顕在化　—　二階にある図書室
２．複数部分顕在化
a+b:　起点部・顕在化・中間部顕在化——　一階の研究室にある机の所から本を取って、二階へ行く階段を上っている途中で運んでいる本を落としそうになる
b:　中間部潜在化の部分——　一階から二階へ行く階段を上り始める階段の途中で、立ち止まる。落としそうになった本を抱えなおす。再び、階段を上り始める
a+c:　起点部・終点部顕在化——　一階の研究室にある机の所から

	二階の図書室まで
b+c：　中間部・終点部顕在化――	一階から二階へ行く階段を上る途中で運んでいる。本を落としそうになる。階段から二階の図書室まで
a+b+c：　「経路」全体に対する最大の顕在化――	一階の研究室にある机の所から階段を上って二階の図書室まで本を運ぶ
3．図：　動作主が本を運ぶために移動しているため、「図」は移動中の動作主とその動作主が持って運んでいる本	

（１９）文中における「階段の途中で『日本史』の本を落としそうになりながら」という副詞句がこのように焦点化される可能性があるのは、（１８）文「私は一階の研究室の机の上に置いてあった『日本史』の本を、二階の図書室まで運んだ」において示したように「一階から二階まで階段を上がって行く」という経路が潜在化されていて、そのため、この副詞句が表層の表現において言語化されていなくても、実際にはこの潜在化されている部分がフレームによって活性化されているためであると考えられる。言い換えれば、「一階から二階まで行く」には「エレベーターに乗って行く」という別の方法が文脈から判定できない限り、「一階から二階まで『階段を上がって』行く」という、「階段を上がって」「行く」という二つの動詞によって表されるそれぞれの行為は連鎖的に連続しているために、「階段を上がって」という動詞句が活性化されているためであろうと考えられる。もう一つの例として、下記の表現法を見られたい。

（２０）　私は『日本史』の本を一階の研究室から二階の図書室に運んだ。階段の途中でその本を落としそうになりながら。

においては、（１９）文によって表現されている状況を、別々の二文によって表現したもので、第二文の「階段の途中でその本を落と

しそうになりながら」という部分は話し手によって焦点化されている部分を表現している。この場合、聞き手は、これらの二つの文は繋がっていること、そして、二つの文の内、第二の文によって表現されている内容とは話し手が焦点化して強調している部分であることを理解することができること、が分かる。では、どうしてそのように推論することが可能であるかという原因・理由について考察すれば、これらの二つの文によって表現されていることは、同じフレームの枠内で発生した関連性がある出来事として、聞き手が捉えることができるためであろうと考えられるのである。

次に、話し手の視点が「二階の図書室」へと移ってその場所が焦点化された場合には、表現法は下記のように変化しよう。

（２１）　二階の図書室が、一階の私の研究室に置いてあった「『日本史』の本」を私が運んだ所だった。

において、話し手が「二階の図書室」が焦点化して前景化することが可能であるのは、「二階の図書室」が、「運ぶ」が作るフレームを形成する構成成員であり、認知カテゴリー化された語群に含まれているからである。

また、話し手が、一階の研究室にある「『日本史』の本」が視界にない、見えない別の場所で、聞き手にその本を二階に運んでくれるように依頼したと仮定したら、表現法がどのように変化し、その変化には「運ぶ」が作るフレームがどのように係っているのか、という問題について考察する。下記の会話例を見られたい。

（２２）　会話例：　場所：　一階の事務室で

Ａ：　林さん、私の研究室にある『日本史』の本を、二階の図書室に運んでくれませんか。

林さん：　はい。分かりました。で、その本はどこに置いてあるのですか。

Ａ：　一階の入り口の隣に私の研究室があります。研究室の窓の側に机がありますが、『日本史』の本はその机の上に置いてあります。

において、話し手のＡによる「林さん、私の研究室にある『日本史』の本を、二階の図書室に運んでくれませんか。」という依頼文には、話し手Ａによる「本が机の上から二階の図書室へ運ばれたらいい。林さんにそうして貰おう。」という判断と「林さんにそれを依頼しよう」という意思があることなどが含意されているが、これらは言語化されていない。話し手によるもともとの視点である「本」から「誰かに運ばせる」ことに視点を移した結果、「（本を）運ばせた結果、どのような状況変化を期待しているのか」という、話し手による願望や希望や期待に沿って表現法は（１７）文から（２２）の会話例のように変化するであろう。

（２２）の会話例の場合は話し手と聞き手には、「話し手の研究室」も「（二階の図書室に運ぶべき）『日本史』の本」も視界にない。そのため話し手は聞き手に「一階の入り口」という第一の参照点を経由して「話し手の研究室」の場所と、「研究室の中の机」という第二の参照点を経由して「『日本史』の本」のありかを聞き手に伝える作業が必要となる。また、（２１）の会話例中に存在する「研究室と述語『ある』」「机と述語『ある』」「本と述語『置いてある』」などの空間関係は、従来の文法観に基づけば、「静的な述語」の典型例と考えられるものである。しかし、聞き手の側に立って「『日本史』の本がどこにあるか」を知るために、話し手の説明に沿って「『日本史』の本』に辿り着く経路を考えてみると、「今いる事務室から話し手の研究室に行く経路」→「研究室に入って机のありかに辿り着く経路」→「机の所まで歩いて行って本を手に取るまでの経路」を自分で架想するのである。この視点に基づいて、（２２）の会話例のような場合を「架想経路」[21]と呼ぶの

[21] 「架想経路」という用語は、F. ウンゲラー／H.-J.シュミット著、池上嘉彦ほか訳『前掲書』、p.273 において用いられている用語のため、本稿ではこの用語に従った。筆者注：その意味は、「仮想」という「空想」に近い概念や意味を指すのではなくて、話し手が離れている物の在りかとか者の居場所を聞き手に説明する時に、話し手のいる場所からその離れている物・者が見

である。

次に、例えば、下記の文例によって表される事態について考える。

（２３） 場所： 動作主Ａは事務室にいる。そして、下記の事柄を考えている。

Ａ： 『日本史』の本のあるページをコピイしたいが、その本を今手元に持っていないため、研究室にある机の上に置いてある『日本史』の本を取りに行って、事務室に返って来よう。

において、(２３)文は動作主である話し手が「研究室へ行って『日本史』の本を取って来て、再び事務室に本を持って帰ってくる」という、連鎖的に繋がっている一連の動作が完了することを表す。この場合、動作の始点と終点が全く同じところであっても、「移動事態全体が生じた」ことには変わりはない。このような場合でも、顕在化・潜在化された経路を通って移動事態が起こったと見なされるが、このような経路を「閉鎖経路」と呼ぶのである。[22]

３．３ 動詞「沸かす」の作るフレームの概念に対する分析と考察

この項においては、因果連鎖的な事態がフレームを作る場合について考える。この因果連鎖事態フレームには「使役」という概念が関わっている。従来の文法的な見方では、使役という概念は非使役動詞によって表される概念か、或いは、使役動詞によって表される概念のどちらかであるとされてきた。しかし、「使役の概念にも段

えなくてもその物がどこにあるかとか、その者がどこにいるかとかがはっきりと分かっている時に、話し手は「意識＝mind」が自分と対象になっているその物・者とに空間的・高架的に繋がっていて、まるでその物の在りかとかその者の居場所とかがはっきりと見えるもののように認知している場合、しかも、ある別のものを参照点にしてその場所・居場所を説明しなければならない状態にある話し手の「意識の経路」を指すために、「架想経路」という用語を用いているものである。

[22] F. ウンゲラー／H.-J.シュミット著、池上嘉彦ほか訳『前掲書』、p.272。

階性があり、ある種の事態は有生物の関与しない事態によって引き起こされるものである（＝事態使役：The vase broke など）」とタルミーは指摘する。[23] 本稿では、動詞「沸かす」を例に上げて、「沸かす」の作るフレームの概念と「沸かす」の最終的な結果に至る段階的なプロセスに対して考察する。

（２４） 私はお客にお茶をもてなすために、薬缶に水を入れて沸かした。

における「沸かす」が作る因果連鎖事態フレームの各段階は「表５」のように細分化されよう。

「表　５」は、（１）動作主による動作の目的を表す第一段階と、動作の結果を表す第五段階の様態が動作主の視点によって焦点化されて顕在化していること、（２）第二・第三・第四段階における動作・様態は省略されていること、（３）しかしながら、第一段階から第五段階における全てのプロセスを構成している要素は連鎖的に連続していて、活性化されていること、などを示している。そして、第一段階から第五段階までの全てのプロセスが連続的に繋がっているにもかかわらず、中間部のプロセスが省略されて第五段階に至ってやっと言語化されることが分かる。

[23] Leonard Talmy, ‘Semantic Causative Types’ in *Syntax and Semantics-8*, p.43-116.

「表　５」　「沸かす」が作る因果連鎖事態フレームの各段階

因果連鎖事態フレームの各段階	例：　私はお客にお茶をもてなすために薬缶に水を入れて沸かした。
1　動作主が行動を起こそうと意図する	客にお茶をもてなすために湯を沸かそうという意志を持つ
2　動作主が体（の一部）を動かして 使役事態を駆動する	手を薬缶に伸ばす、水の在る所に薬缶を 運ぶ、・・・水を薬缶の中に入れる、コンロの所に運んで来る、コンロにのせる
3　互いに因果関係でつながる中間的 下位事態	火をつける、薬缶を熱し始める
4　最後から二番目の下位事態＝最終 結果の直接の原因	薬缶は火に熱せられ続けることによって 中の水が湯に変化する
5　最終的に結果する下位事態	湯が沸く

また、言語化されている第一段階と第五段階の次に重要な段階は、言語化されておらず省略されてはいるが活性化されていて連鎖的に連続している要素の一つである第四段階である。それは、第四段階が第五段階の結果を導く直接的な原因を示しているからである。

（２５）　薬缶は火に熱せられ続けることによって、中の水が湯に変化している。

という文は、第四段階の様態を表す文が、第五段階の様態を示す

（２６）　湯が沸く。

という結果を聞き手に簡単に推論させることができるからである。このようなある動作の目的を達成するためのプロセスの途中の、言語化されておらず省略されている部分においても、視点をその省略されている部分に置いて焦点化すれば、言語化される可能性は高い。（２５）文による表現法は、第一段階の最後の動作と第二段階の最初の動作の組み合わせに視点を移してその部分を言語化して述語部分を形成した場合を表現する。また、（２６）文は第三段階に視点を移してその部分を言語化して述語部分を形成した場合を表現している。しかし、

（２７）　私はお客にお茶をもてなすために、薬缶をコンロにかけて火をつけた。

（２８）　私はお客にお茶をもてなすために、薬缶を火にかけて熱している。

において、これらの（２７）（２８）の二文は、いずれかの表現法によって文として言語化されたとしても、聞き手は「話し手が客をもてなすために、湯を沸かしているのだという様態」を推論して、「湯が沸く」という結果を導き出すことができることを示す。それは、言い換えれば、動詞「沸かす」という概念が、「表　３」の第五段階の状態を表す「沸かす」という動詞によってのみその概念を表現できるのではなくて、第三段階の状態を表す「薬缶をコンロにかけて火をつけた」によっても、第四段階の状態を表す「薬缶を火にかけて熱している」によっても、「沸かす」という概念をフレームの機能に基づいて表現し得ることを示しているのである。

４．　まとめ

以上の分析と考察によって、ある特定の動詞が作る「フレーム」

という概念は、その動詞の表す概念のみならず、実際に言語化されている以上に、省略されている部分で連鎖的で連続的な動作の一部を担っているものを含む広い意味領域をカバーすることができる機能があることを明らかにした。その発見は、また、話し手は、従来のような、話し手によって選択された動詞が要求する主語や目的語のみに視点を置いた表現に制限されずに、段階的なプロセスにおいて省略されている部分で連鎖的で連続的な動作の一部を担っているもの――主語や目的語以外の文成分である挿入句や副詞句など――にも視点を置いて表現法を変化させることを可能にする機能がフレームにあることを示唆するものである点を指摘して、本稿のまとめとする。

参考文献

金水敏・今仁生美（2000）『意味と文脈』岩波書店
言語学研究会編（1983）『日本語文法・連語論（資料編）』むぎ書房
新村出編（1990）「広辞苑」岩波書店
松本曜（2003）『認知意味論』大修館書店
山梨正明（1995）『認知文法論』くろしお出版
――――（2000）『認知言語学原理』くろしお出版
ウンゲラー，F.／ シュミット，H.J.著、池上嘉彦ほか訳（1998）『認知言語学入門』大修館書店(原典：Ungerer & Hans-Jorg Schmid, *An Introduction to Cognitive Linguistics,* by Addison Wesley Longman Ltd., London,1996.)
レイコフ・ジョージ著、池上嘉彦・河上誓作ら訳（1998）増補版『認知意味論－言語から見た人間の心』紀伊国屋書店（原典：George Lakoff（1987） *Womenn,Fire, and Danerous Things-what Categories Reveal about the Mind,* The University of Chicago Press.)
レイコフ・G、ジョンソン・M著、池上嘉彦ら訳（1999）増補版『レトリックと人生』紀伊国屋書店（原典： George Lakoff and Mark Johnson, *Metaphors We Live By*, 1980, The University of Chicago Press)
Fillmore, Charles J. and Beryl T. Atkins（1992）‘Toward a frame-based lexicon: The semantics of RISK and its neighbors’ in *Frames, Fields, and Contrasts,* Adrienne Lehrer and Eva Kittay, eds., Hillsdale, N.J. Lawrence Erlbaum, Assoc.
_____（1977）‘The Case for Case Reopened’ in P. Cole and J.M.Sadock, eds, *Syntax and Semantics, Vol.8: Grammatical relations*, Academic Press, S.F.
Langacker, Ronald W.（1987）*Foundations of Cognitive Grammar-Vol. 1 Theoretical Prerequisites* Stanford University Press.
_____（1988）‘A View of Linguistic Semantics,’ in T*opics in Cognitive Linguistics*, ed. Brygida Rudzka-Ostyn, John Benjamins, Amsterdam.
_____（1990）‘Settings, participants, and grammatical relations’ in Savas L. Tsohatzidis ed., *Meanings and Prototypes, Studies on Linguistic Categorization*, Loutledge, London, England.
Minsky, Marvin（1975）‘A Framework for Representing Knowledge’ in P.H. Winston, ed., *The Psychology of Computer Vision*, McGraw-Hill, New York。

Schank,Roger C. and Abelson, Roger P.（1977）*Scripts, Plans, Goals and Understanding*, Lawrence Erlbaum, Hillsdale, N.Y.
Talmy, Leonard（1996）‘The Windowing of Attention’ in Masayoshi Shibatani and Sandra A. Thompson, eds, *Grammatical Constructios: Their Form and Meaning*, Oxford University Press, Oxford.